

「〔見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる〕。この名は、〔神は我々と共におられる〕という意味である(マタイ 1:23)」。

讚美歌「96 エサイの根より」で「イザヤの告げし救い主しは」とうたわれるように、天使は「インマヌエル」を預言書に重ねて告知する(イザヤ 7:14)。

「インマヌエル、神は我々とおられる」という福音を最初に聞いたのは誰であったか。言うまでもなくヨセフ、彼は夢の中で天使がそう語るのを聞いた。いやそれ以前、すでにマリアがその身体の変調によって(マタイ 1:18)「聞いていた」のではないか。

とにかく東方の占星術学者より(2:1~2)、マリアとヨセフは誰よりも先に、「インマヌエル、神は我々と共におられる」という福音を受け取った。

ふと、母マリアはどこにいるのかな、とあたりを捜してみた。ルカ福音書ではあれほど前面に出て、天使と印象的なやりとりをしているのに、マタイ福音書ではどこにも見当たらないじゃないか。

マリアの姿は、イエスの誕生後わずかにちらりと見られる。東方の占星術学者が夜半に来訪した折、「幼子は母マリアと共におられた(2:11)」と報告されるだけで、まるで存在感がない。迫害を逃れてエジプトへ逃亡した時には、もう「幼子とその母(2:14,21)」と呼ばれて人格的な個人名は消えている。

考えてみれば父ヨセフも、「ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ(2:22~23)」以降は消息を断つ。最初に「インマヌエル」という福音を告げ知らされた二人の、何という存在の薄さか。「インマヌエル、神は我々と共におられる(1:23)」という救いの御言葉はきわめて重要なのに、それを最初に聞いた父と母の静かで控えめな姿は、「インマヌエル」の何事かを語っているのか。

ルカ福音書では、マリアは天使の言葉の意味が分らず(ルカ 1:34)、納得してのことではないが「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」と応じ、神の業に身を委ねている。マリアのみならずヨセフも、人間の想像力を超えて働く神の業に自分を献げているのか。

ヨセフは、ひとことも語らずに随分思い切った行動する。この無口で大胆な父によって、幼子イエスと母マリアは生き延びえた(マタイ 2:14~15,21~23)。こんな父や母をどう呼ぼうか。

「インマヌエル」の恵みによる力で、道なき荒野へ踏み込んで行く「徹底した受容の人」とでも言えようか。

一人ひとりの存在は神が創造し、日々その個性を存分に発揮できることは幸いだ。だが救い主の降誕を前にして、私たちの違いなどあまりに小さい。「インマヌエル、神は我々と共におられる(1:23)」ことに飾った表現など不要。この救いを言い表すために、人間の特性や能力、勢力はまるで必要ない。イエスの父と母のように、私たちはこれをただ受け取るだけ。

神はここで私と共におられる。あなたと共におられる。共にいて呼吸し(聖霊の徴)、共に悲しみ、共に痛み、永遠に共におられる。

沈黙したままの父ヨセフと姿が見えない母マリア。この静けさには彼らの悲しみの気配がある。しかし二人は、「インマヌエル、神が共におられた」がために救い主イエスの家族となりえた。そしてそのことは、生きることに死ぬことに制約されない、心の底からの喜びであった。

キリスト者にもそんな面影があるんじゃないか。インマヌエルの内に人間の生と死がある。今ここで自由に、永遠に。



#### 《おまけのひとつ》

インマヌエル 付け足すことも 削ることもできない 私たち一人ひとりに告げられた永遠の約束とはいえ これを受け取る人生は一つとして同じものがなく 各々未知のインマヌエルを体験する